

清末における西安・咸陽事情

——川田鉄弥の『支那風韻記』を中心に

張 新芸

はじめに

江戸時代の日本は海禁政策、所謂「鎖国」政策を実施したために、中国との接触が極端に制限された¹。相互の国情を知る手段が基本的に長崎渡航の中国商船の乗組員²及び中国難破船の漂流民と日本人との筆談のみに限られていた。³しかしながら、幕末・明治以降、開国に伴って中国へ渡った日本人はかなり増えた。彼らの記した中国事情も近年シリーズとして出版された。⁴これらの中国事情を通して、幕末・明治期即ち清朝の光緒年間における日本人の中国観が窺える。これらの見聞録は、ほとんどが中国の東北地域、日本人がかって満洲と呼称した地域や北京とその周辺地域、長江中・下流地域にある大都市即ち上海や南京、漢口及び沿海都市の杭州、福州、厦門、廣州などであり、それらの地が注目されていた。しかしながら、広々とした西北地域にある重要都市の西安・咸陽についてはほとんど注目されていなかった。ところが西安・咸陽の地に注目した日本人がいる。それは川田鉄弥である。この川田鉄弥によって書かれた『支那風韻記』には西安・咸陽の清末の状況が述べられている。この『支那風韻記』に叙述された西安・咸陽事情は、清末の西安・咸陽の史蹟を中心に述べているが、数少ない外国人の見た西安・咸陽事情として貴重である。

そこで、本稿では川田鉄弥の記した西安・咸陽事情を中心に、19世紀末20世紀初めの西安・咸陽像について検討してみたい。

2、川田鉄弥の経歴

それでは『支那風韻記』を記した川田鉄弥とはどのような人物であったろうか。

川田鉄弥(1873<明治6>-1959<昭和34>)は土佐の初月村(高知市)の出身で、1892(明治25)年から1899年にかけて、高知県の中学校を卒業後、東京帝国大学文科大学に入学し、卒業後は文部省に入った。その後、東京専門学校(早稲田大学)講師を兼任しながら、陸軍学校

教官を務めた。教員生活で一貫教育の必要を痛感し、退職後、1903年に東京の大久保に高千穂学園となる高千穂小学校を創立し、校長に就任した。さらに、1907年に幼稚園、1909年に中学校、1914年に全国初の私立高等商業学校を創設し、幼稚園から高等学校までの一貫教育を行う総合学園を完成し、その教育と運営に当たる。

以上のように、川田鉄弥は知識豊かな教育者であり、学者でもあったことから、彼の著者の内容は信頼性の高いものと考えられる。

川田鉄弥の著した『支那風韻記』は、大正元年（1911年）十月二十八日に印刷され、大倉書店から十一月一日に発行されたものである。内容から見ると、主に「口繪」と「支那小観」、「支那風韻記」と「朝鮮満州小景」から成っている。しかしその各章には具体的日付けがないことから、いつごろ書かれたか、不明であるが、明治末の中国旅行をもとにしたものであることは確実である。このことから、日本の明治末で中国の清末期のことだと推測できる。

川田鉄弥の中国旅行の旅程は、次のように行われた。

川田鉄弥は、まず京奉鉄道を利用して、「天下第一関」と呼ばれる山海関に着き、天津、青島、泰山、曲阜、北京で天壇、雍和宮、石頭牌樓、万寿山、十三陵、万里の長城を見物した後、京漢鉄道によって洛陽から西安と咸陽を訪れ、武漢、長沙から長江を下って相前後して南京、揚州、杭州、上海までに至っている。彼は、おそらく帰国後であろうと思われる時期に、『東京朝日新聞』明治45年（1912）6月24日付けに「支那に関する疑問」という記事を実名入りで掲載し、中国並びに中国人に対する印象を次のように述べている。

其一 現在の支那に、利己主義以外、多少話せる人物があるのであろうか、換言すれば、心から国家の前途を気遣うて居られる真面目な人物が居るのであろうか、…中略…、革命騒動は、遠くの人に豪い勢いの如く見せかけ、或志士の指導に依り、兎に角、物になったが、斯の如き国勢の際にも拘らず、其間に静に大事に料理れせらる程の人物は、先ず先ず一人もないように思われる、…略…。

其二 既に人物は乏しい、それとも、国民がたのもしい国民であろうか、此点に就て、調べて見るに、所謂夫子の教鞭を執られることはあれど、極めて少数の人士の子弟が、稍、文字を解せつに止まり、四億の国民は、苦力同様の眼中一丁字もなき憐むべき輩である、…略…。

其三 支那の動脈とも仰ぐべき、水陸の交通機関は、何れも列国に奪われつつあるではなかろうか、…中略…。

其四 借款問題が、自から生み出す第二の課題は、如何であろうか、既に只今迄に各省で、鉱山其他の物件を担保に入れ、列国の会社等より借り入れた負債もあろうに、今又目前に

軍隊解散費及行政費等に充つる為に、借款問題成立の必要が切迫している、借款又借款、列国競うてこの借款に応ずる心底が如何であろうか。

其五 中華国民は、どの位、つづくであろうか兎に角、極端に中央政府の権力の乏しい共和政体、換言すれば、各省毎に、多大の実権を有する共和政体で進まねばなるまいが…中略…、書物の上で調べた支那大国と、實際踏査した支那大国とは、著しく相違の点がある、孔孟の立派な学問は、日本に於て、其実を見る事が出来るも、支那大国では、所謂有名無実の嫌がある、…略…。

とある。

この記事とほぼ同内容の文章が、『支那に関する疑問』として『支那風韻記』の四〇にも掲載されている。

以上のことから、川田鉄弥の『支那風韻記』は明治末の彼の中国旅行の印象記であったことは確かである。

そこで次節において、『支那風韻記』に記された西安・咸陽事情について述べてみたい。

3、川田鉄弥の『支那風韻記』に見る西安・咸陽事情

『支那風韻記』に記された西安・咸陽の内容に関して、まず、原文を掲げてみたい。

『支那風韻記』二一、長安の感慨

一たび洛陽の勝を探り、更に行程十日を要する長途の旅行を試み、新函谷・義昌鎮を経て、蔣相如が外交の手腕を振へる秦趙會盟の地澠池を過ぎ、穀陵の險を超え、史に陝より以東は、周公之を司り、陝より以西は、召公之を司ると見えける、陝州の里に入り召公の祠に詣で、靈寶縣より西又西に向かひ、孟嘗君が、客をして鶏鳴くを學ばしめ、讒に脱することを得たる函谷關を過ぎ、古の所謂桃林の地を経て、項羽・沛公二傑の會合せる鴻門の地に入り、臨瀧に、始皇の陵を拝し、驪山に雲低く立ち迷へる憂愁の状を仰ぎつ々、長安の城に入ることが出来る。

長安の如きも、是と共に、變遷移動したものと見える。漢時代の都城は、今の西安府の北二里にあつたもので、今の西南府は、隋唐より宋・金・元・明時代にかけての都城である。しかし、時代を経る毎に、多少改修を加へて、今日の如く、東に長樂門、西に安定門、南に永甯門、北に安遠門を有する、周回四里程の城壁高さ三丈四尺厚さ三丈八尺乃至六丈のある城市と、なつたらしい。心ある旅客は、碑林に、大小数百の石碑を撫して、昔を偲び、小雁塔・大雁塔、の遺跡、唐中宗景龍二年(西暦 708 年)の創建に係る迎祥觀、正其誼

不謀其利明其道不計其功と言はれける董仲舒のお墓、二程子と共に、力を併せて、聖学を鼓吹せられたる張横渠の祠、蕭何の作られたる未央宮の荒れ果てたる跡などを尋ねる。或い、亥装三蔵が経典を訳されたる洪福寺、隋代に上天竺の沙門闍羅笈多佛教数百卷を訳せる興善寺を始め、金勝寺、清真寺等を訪ひ、或は又、南山の雲を見、渭水の流を聞き、懐古の感にうたれる。⁵

『支那風韻記』二二、咸陽の懐古

渭水の北、九峻山の南に至り、この附近が、秦の都 咸陽の地かと思ひ、遺跡を尋ね、項羽に焼かれ、その火が三ヶ月消えなかったと云ふ阿房宮の偉観を想像し、帝王陵墓の存する 原に遊び、周の文王陵を基點として考ふれば、武王陵は北に接し、大公望・周公・伯禽の墓は東に、康王の陵は東南に、成王の陵は西南にある。尚、飽き足らずして、平陵・延陵・涇陵を始め、漢代帝王の陵墓を探り、漢陽城外、漢孝武帝の茂陵、唐太宗の昭陵に詣れば、荒廢の情を見るにつけ、

漢國山河在、秦陵草樹深、暮雲千里色、無處不傷心。

の感が起る。今は陵墓四囲の境界も、概ね明かに辨じ難い。此を思ひ、彼れを思へば、陵墓は、数千年の後迄も、永久不滅の工事を施した上、種々の點に於て、注意に注意を加へ、堅固に營建せねばならぬ。⁶

と記されている。

そこで、この文章は明治期の日本人が書いた文であるため、現代日本語に訳し内容を検討してみることにする。

洛陽の名勝旧跡を訪れてから、約十日ぐらいかかる長い旅をした。そのうち、新函谷、義昌鎮を経て蔣相如が外交の腕を見せて秦と趙とに盟約を結ばせた澠池を過ぎ、穀関という関所を越えた。この関所を境目して、歴史における名高い周公と召公はそれぞれ東のほうの国政と西のほうの国政を司るということだった。西に進んで陝州の域内に入った。召公の祠に参った。それから靈宝県より進んで、孟嘗君の居候が鶏の鳴き声を真似て秦国よりの邪魔から抜け出した函谷関を過ぎ、古くから呼ばれていわゆる桃林を経て、項羽と劉邦が会った鴻門に入った。それから臨潼で始皇帝の陵墓を拝謁し、驪山の麓で低く立ち迷った雲の憂愁さを眺めた後で、長安城に入った。長安城もそれと同じように幾多の変遷を経たことがわかった。漢の時代の都は今日の西南府より北に向かって二里あたりにある。今日の西南府は隋、唐の時代を経るごとに多少とも改修を加えられ、今日のように東は長樂門、西は安定門、南は永寧門、北は安遠門である。城壁が残っている城は懐かしい気がする。一回りで4里ぐらいで、高さが三丈三尺、厚さが三丈八尺乃至六尺だ。心ある見物客

は碑林で大小数百の石碑を撫でながら昔の様子をしのぶという。小雁塔、大雁塔の遺跡、唐時代の中宗皇帝景龍二（708）年に創建された迎祥観がある。

迎祥観については、『大清嘉慶重修一統志』卷二三〇、西安府四に、

迎祥観 在長安縣治東、即景龍観、唐景龍中建。⁷

とあり、迎祥観は、唐代には長安県の管轄域のやや東に位置していた。景龍観とも言い、唐の景龍年間に建立されたことが知られる。

そして「其の誼を正し其の利を謀らず、其の道を明らかにし其の功を計らず」という名言を吐いた董仲舒のお墓、二程子と共に力をあわせ孔子学を鼓吹した張横渠の祠、蕭何によって造られ、すでに荒れ果てた未央宮の遺跡などを訪ねる。或いは、玄奘三蔵法師が經典を訳した洪福寺がある。洪福寺は、『大清嘉慶重修一統志』卷二三〇、西安府四に

洪福寺 在長安縣西門外、舊在咸寧縣南大趙村、即宏福寺、唐貞観八年建、沙門元奘訳經處、神龍元年、改名興福。金大定四年、改額洪福、明洪武二年徙此。⁸

とあり、洪福寺は、長安県西門外の元の咸寧県南大趙村にあった宏福寺であったが、唐貞観八（634）年に建てられ、玄奘三蔵法師が仏教經典を訳した処である。神龍元年（705）に興福寺と改称したが、金代の大定四年（1164）に洪福と改名し、明の洪武二年（1369）にこの地に移された。

さらに隋代における上天竺の沙門闍羅多佛教数百卷を訳した興善寺をはじめ、金勝寺を訪れた。金勝寺は、『大清嘉慶重修一統志』卷二三〇、西安府四に、

金勝寺 在長安縣西郭外、即崇仁寺、唐建、寺有唐檀法師塔銘、景教流行中國碑、明天順中、秦藩重修、壯麗甲於諸寺。⁹

とある。金勝寺は、長安県の西城郭外にあった崇仁寺である。唐代に建てられた。境内には唐檀法師塔銘文と、西方から伝わったキリスト教の一派であった景教の流行中国碑がある。明代の天順年間（1457～1464）に再び修理を加え、その壮観さは諸寺に勝っていたとされる。

清真寺などをも訪れ、ちなみに南山の雲を眺め、渭水の流れを聞き、懐古の感を歌った。

川田鉄弥は今日の河南省にある新函谷、義昌鎮、澠池、穀関、陝州、靈宝県、函谷関、桃林を相次いで訪れた後、陝西省に入った。陝西省内において足を運んだ景勝地は鴻門、始皇帝の陵墓、碑林、小雁塔、大雁塔、迎祥観、董仲舒の墓、張横渠の祠、未央宮の遺跡、洪福寺、興善寺、金勝寺、清真寺などであった。そして川田鉄弥が言及した歴史人物は楚漢の争いで知られる項羽、劉邦、そして秦の始皇帝、唐の則天武后の子で第四代皇帝となった中宗李顕、前漢の儒者董仲舒、宋代の二程子即ち程顥・程頤兄弟、朱熹の学問形成に大きな影響を与えた張横渠即ち宋の張載、そして前漢の丞相であった蕭何、『大唐西域記』の著者で唐代においてインド

から仏教経典をもたらした多くの訳経事業を行った玄奘三蔵法師などであった。その中で特に西安城の城門と城壁の様子を詳細にわたって書いて、「なつたらしい」と感嘆した。作者自身が中国のこと、特に古代中国のすばらしい文化に憧れを持っていることが窺えるのではなかろうか。

二二、感陽の懐古

このタイトルには感陽とあるが、「感」の字ではなく、その内容から咸陽の「咸」と誤ったことは確かである。

渭水の北側、九峻山の南側に至った。この附近はかつて秦の都だった咸陽だと考え、遺跡を尋ねた。項羽によって焼かれ、その日が三ヶ月続いて消えなかったという。阿房宮の雄大さを想像できる。古代から帝王陵墓が数多く抱える野原で遊んで、奴隷社会の周代の文王の陵墓を基点として考えてみると、武王の陵墓が北に接近し、大公望・周公・伯禽のお墓が東に、康王の陵墓が東南に、成王の陵墓は西南にある。又、飽き足りず平陵・延陵・涇陵をはじめ、漢の時代の帝王の陵墓を探って、漢陽城郊外にある孝武帝の茂陵にも唐の時代の太宗皇帝の昭陵にも拝謁したが、すっかり荒れ果てていることがわかった。そのため、「漢国山河在り、秦陵草木深し、雲暮れて千里の色、處無しに心を傷からん」と感心した。今日では、陵墓の周辺もはっきり見分けられない。このことを考えてまた彼らのことを振り返れば、陵墓は数千年にわたっても永久の工事を施された上に、種々の点において注意に注意を加えられ、堅く建てられたものである。

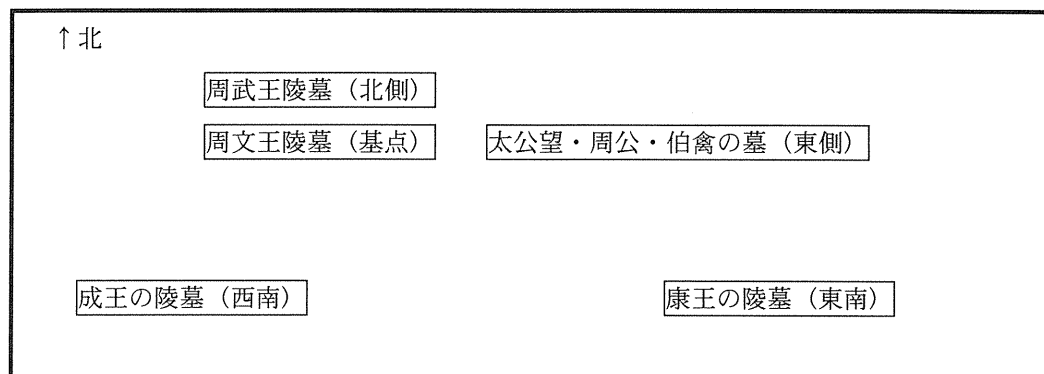
作者が秦の都だった咸陽を訪れようとしたが、古代に全焼したため見られなかった。周時代の文王の陵墓、武王の陵墓、太公望・周公・伯禽のお墓、康王の陵墓、成王の陵墓の位置を推測した。更に高原に点在した漢時代の陵墓を訪れ、見つかったのは平陵、延陵、涇陵、茂陵のみに止まった。その荒れ果てた様子に対して、杜甫の詩を引用し、嘆かざるを得なかった。

川田が「二一、長安の感慨」において、名所旧跡に関して一切の廃墟の様子を書かず、中国古代文明への憧れている思いのみを記しているのに対し、「二二、咸陽の懐古」では、杜甫の詩を借り、史上輝かしい文化を作り出した唐代の長安と咸陽について述べ、さらに清末の衰微ぶりを嘆いたと言えよう。

次に作者の訪れた西安と咸陽辺りにある名所旧跡を一覧表にしてみると、以下のようなであろう。空欄は川田鉄弥の記録が無い箇所である。備考欄は『中国名勝詞典』¹⁰⁾によって注記した。

名勝地	関連歴史人物	時代	関連歴史事情	備考
碑林				西安市三学街
小雁塔				西安市南薦寺内
大雁塔				西安市南慈恩寺内
迎祥観	唐中宗	唐	唐中宗景龍二年創建	
董仲舒の墓	董仲舒	漢	正其誼不謀其利，明其道不計其功	
張横渠の祠	張横渠	漢	二程子と共に、力を合わせて聖学を鼓吹	
未央宮	蕭何	漢	蕭何が建てた	西安市漢長安城西南部西安門里
洪福寺	玄奘三蔵法師	唐	經典を訳した場所	
興善寺		隋	上天の沙門 羅笈多佛 經数百卷の翻訳場所	西安市南 2.5km
金勝寺				
清真寺				西安西北隅化覺巷

さらに、川田鉄弥の『支那風韻記録』によると、周時代の王陵があった位置関係は以下のようなになるであろう。



小結

清末の光緒年間末において北京から天津そして洛陽を経て西安・咸陽を訪れた川田鉄弥は、西安・咸陽の印象を『支那風韻記』の中に著した。その記録に見られる当時の西安・咸陽の様

子は、景勝地のみの描写に限られたが、同時代の日本人の記録としては極めて少ない中で非常に貴重なものである。この川田鉄弥の叙述を通して、彼自身が見た西安・咸陽には、中国古代からの歴史に深く関わっている遺跡が依然として残っていたことに深い感銘を受けたのであった。現にこれらの史蹟は西安市及び咸陽市の重要な観光資源となっている。

古代中国の優れた伝統文化に深い感銘を受けた川田鉄弥ではあったが、一方では、杜甫の詩に描かれた盛唐時代が衰微し嘆いていることとともに、現実には彼が見た清末の西安・咸陽の遺跡に見られた荒廃の状況と重ねあわせ、恐らく川田が文献などで知っていた前漢時代や大唐帝国の盛大さが、眼前ではその一端すら見る事が出来なかった。知識として知っていた中国古代文化の盛大さと、現実の荒廃の姿との落差に嘆いている姿を読み取ることが出来るであろう。

¹ 山脇悌二郎『長崎の唐人貿易』吉川弘文館、1964年4月初版、1995年6月新版参照。

大庭脩『江戸時代の日中秘話』東方書店、1980年5月。

大庭脩『徳川吉宗と康熙帝—鎖国下の日中交流』大修館書店、1999年12月。

² 清雍正年間に長崎へ渡航した中国商人から得た情報をまとめたものとして童華の『長崎紀聞』がある。これについては松浦章「清代雍正期の童華『長崎紀聞』について」(『関西大学東西学術研究所紀要』第33輯、2003年3月、41~60頁)が参考になる。

³ 張新芸「江戸時代における日本漂着中国人の日本像—筆談史料を中心に—」(張昇余主編『日本学論文集』陝西人民出版社、2000年3月、100~120頁)は、長崎へ渡航すべき貿易船が海難事故に遭遇して、日本の沿海地域に漂着し、その漂着地で中国船の乗組員と現地の日本人との間で筆談によって交わされた記録から考察したものである

⁴ 小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第1巻~第20巻、ゆまに書房、2004年1月~8月。

⁵ 小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第18巻、ゆまに書房、2004年8月、426~428頁。

⁶ 小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第18巻、ゆまに書房、2004年8月、429~430頁。

⁷ 中華書局本『大清嘉慶重修一統志』一四冊、卷二三〇、西安府四、11295頁。

⁸ 中華書局本『大清嘉慶重修一統志』一四冊、卷二三〇、西安府四、11290頁。

⁹ 中華書局本『大清嘉慶重修一統志』一四冊、卷二三〇、西安府四、11291頁。

¹⁰ 『中国名勝詞典』第二版、上海辞書出版社、1986年12月、1992年2月第9次印刷、1003~1011頁を参照。